

ドキュメント 赤いゼッケン

勝利報告号

沖電気指名解雇撤回闘争 3033日 1978.11/21~1987.3/13



全国のみなさん
支援ありがとうございました。

八年四カ月のご支援

ありがとうございます。

成果と教訓を共同の財産に

全国の闘う仲間の暖かいご支援と大きな闘いによって、沖電気指名解雇撤回闘争は、三月十三日、東京地方裁判所において、和解が成立し、終結することが出来ました。

解決内容は、①指名解雇の撤回 ②三十五人の職場復帰 ③解決金十二億九千万円：というものです。

指名解雇という、労働者の働らく権利、生きる権利、団結する権利を一方的に奪い去る資本の最も横暴な攻撃をはね返し、勤続年数の通算など権利を回復させて、三十五人を復職させたことは、画期的な大きな勝利です。

この成果は、七十一人の争議団の団結を軸として、労働者の生活と権利の向上、労働組合の強化を願うすべての仲間の共同の闘いによって獲得されたものです。

この勝利は、首切り・権利侵害など資本の苛酷な攻撃と闘っている仲間を限りなく励まし、いかに情勢がきびしくとも、労働者の闘うエネルギーに正しく依拠して闘うならば、必ず道が拓けるといふ確信を与えるものです。中央共闘会議は、今回の和解内容が、完全に実行されるのを見守りつつ、八王子工場の田中君不当配転・解雇事件などの解決に向けて努力するものです。また、共に闘われた皆さんといっしょに、この闘いを総括し、この成果と教訓を共同の財産にしたいと考えています。八年半まさにあらゆる犠牲をはらって闘い抜いた争議団とその家族の皆さん、そして惜しみないご支援を与えつつ下さった全国の仲間の皆さんに、心からの敬意と感謝を申上げ、お礼といたします。

一九八七年三月

沖電気争議支援中央共闘会議

事務局長 井川昌之

蟻が巨象を倒す

七十一人全員の指名解雇を撤回させ、三十五人の仲間を復職させることが出来ました。全員でもどることはありませんでしたが、勝ったのだとみんなで喜びあえる解決を手にすることが出来ました。

手づくりのゼッケンをつけて、首を切られた者ばかりで沖電気の本社に抗議したところから、闘いが始まりました。ほとんどの人がこんな大きな、そして長い闘いになるとは考えてもいませんでした。その時の怒り、こんなひどい首切りを許してたまるか、という思いが八年半私たちを貫ぬき続けたました。

一九八〇年五月、日比谷野外音楽堂は組合旗でうずめつくされました。

一九八二年十一月、東京都体育館に八千人の連帯の歌声が響きわたりました。一九八三年、富士銀行本店は東京総行動の仲間たちに包囲され、その秋、全国の沖電気・富士銀行に向けて、一斉に抗議行動が展開されました。八年半、絶えることなく、争議団への激励とカンパが寄せられ、会社のしめつけにもかかわらず、職場の仲間は私たちに声援を送りつけてくれました。今、私たちは蟻が巨象を倒すのを眼のあたりに見た思いがしています。七十一人のうち、伊藤善正さんを失いましたが、抱えきれないほどの家族と、一緒に闘ってくれた仲間が出来ました。力を合わせれば、勝てるのだという確信を、闘いの最大の財産として、私たちは新しい出発をします。

長い間、ありがとうございます。

一九八七年三月

沖電気争議団

代表 中山森夫



「おはようございます! 沖電気争議団です」相原勝美は、二人の子を育てながら71人の仲間とともに闘いぬいた。

PHOTO 藤田庄市



立ちはだかる

解雇後、はじめての正月。争議団の抗議に会社側がビケを張った



PHOTO 森住 卓

	付
こ	に
の	て
場	貴
合	殿
に	を
は	解
	雇
	致
	し
	ま
	す
	。



七	、		総	支	日	、
号	こ	右	務	給	付	希
の	の	期	課	致	で	望
規	通	限	—	し	発	退
定	告	ま	本	ま	表	職
に	書	で	店	す	し	扱
よ	を	に	は	の	た	い
り	以	貴	人	で	希	と
昭	て	殿	事	、	望	し
和	、	よ	課	別	退	、
五	就	り	—	送	職	昭
十	業	退	宛	の	条	和
三	規	職	御	退	件	五
年	則	の	申	職	に	十
十	才	申	出	届	よ	三
一	七	出	下	に	る	年
月	十	な	さ	よ	退	十
二	四	き	い	り	職	月
十	条	時	。	当	金	十
日	才	は		社	を	七

自分が解雇された怒りよりも、希望退職をやめていった多くの仲間たち、職制の監視下での職場集会で「組合は解雇を認めず支援を続けるべきだ。」と、最後まで頑張ってくれた職場の仲間たちのくやしさを思うと、いつもつまって泣いてしまう。何を訴えたのかわからなかった。争議団の中で「泣きの平井」といわれた。あれから八年。いま、沖電気に指名解雇を撤回させることができた。

「勝ったよ」の一言で電話のむこうで泣き出したおふくろ。心配をかけた兄妹たち。「泣きの平井」はもう泣かない。

平井盛博（沖電気争議団）

お父さんとお母さんが

働けるようになった……

僕の思っていること

東田慎吾

僕は今、十歳です。もうすぐ五年生になります。僕が二歳のころ、お父さんとお母さんは働きたいのに働けなくなりまして。それからずっと会社とたたかってきました。僕のアルバムを見ると、お父さん、お母さん、利くんや学といっしょに、どっかに遊びに行った写真はあんまりないけど、じむ所の人やたくさんの方が集っていたり、あるいている写真はいっぱいあります。僕はやっぱりデイズニールランドとかいろんな所に行った写真があつたほうがいいと思います。お父さんと、お母さんが働けるようになったので、

夏休みに家族で、沖縄のおじいちゃんの家遊びに行きます。その時は、いっぱい写真を撮りたいと思います。それでいっぱい海でおよぎたいと思います。僕はちいさい時、じむ所や集会、デモに行っただけ、このころは利くんと学と三人でるすばんをしていることが多いです。でもるすばんをしているほうがじむ所や集会に行くより、とってもたのしいです。

(沖縄電気争議団 東田稔・照子夫妻の次男)

子らのためにも

78年十一月二十一日 門前での就労闘争の情景が昨日のように想い出されます。扉のむこうに職制のビケ……。

寒さがきびしい日でした。懐炉を手に

お腹の子をさすりながら、「会社の仕打ちには許せない。子どもたちのためにも」と、決意を固めた日のことを……。それから八年。

つい先日、三人の息子たちがお世話になった洗心保育園の園長さんや、職員、父田のみなさんがつくってくれた「東田さんを励ます洗心の会」が、勝利の確信と争議後の交流を確認する集いを開いてくれました。

闘いの中でつくられた「こぶしの防波堤」(中島修一 作詞・作曲)の歌を子どもたちは、よく口づさみながら、通園、集会にも参加してきました。

へはたらく ほこりをふみにじる カイコつづく いちまいに もえるいかりが わきあがる……。工場前をつつん

だ「うた」こえ行動隊」をかわきりに、民族歌舞団「わらび座」の支援。潮のうねりのように、全国津々浦々から寄せられた激励のかずかず。その支援に支えられ、親子とも元気に闘ってることができました。

解雇後に生れた三男の学は、この春小学校二年生。次男の慎吾は五年生。長男の利比呂は中学一年にと、たくましく成長しました。

闘いのさ中に他界された伊藤善正さん。交通事故で車椅子の生活になってしまった輪干さん。また、わがことのように、寝食を忘れて、支援していただいたみなさんのさまざまな困難や怒りをも心にとめ、新たな出発をします。

東田照子(沖縄電気争議団)
※東田稔・照子は、ともに高崎工場へ復帰



PHOTO 森住卓



夫婦とも指名解雇され、家族は力を合せて生きた。



人間のあたたかさに感動して…



「世の中、捨てたもんじゃない」が、口ぐせの相原幸雄は、家事も育児もよくこなした。

PHOTO 森住 卓

電話もガスもきられて

東京にあって沖電気に入社。世の中のことにについて考えはじめた頃夫と知り合い結婚。二人で働いてやっと生活できる賃金ではあったがお互いに人間らしく生きようと懸命だった。お腹には新しい生命が宿っていた。この会社ですと働き続けようと決意した時だった。沖電気は一方的な指名解雇という手段で私と、そして夫までも職場から放りだした。組合の力なさをなげながら人間一人というの弱い者なんだと。また、なぜ、犯罪人扱いを受けなければいけないのかと当時の手帳に走り書いていた私だった。

無事女の子を出産。それからというもの保育園をさがし争議団の活動に参加した。やはり朝ピラと夜の集会には子供は足手まといでどうしても女である私に負担がきてしまう。沖電気門前でのピラまきは交替で参加した。まったく新しいことばかり。今思えば、何がなんだか分からず必死だった。その頃は頸腕で箸が持てずひどい痛みで夜も眠れない日が続いた。精神的にも落ちこんで二カ月の休養と診断され、故郷の沖縄へ帰った。親類の人からはつらかったらいつでも帰って来いと言われた。

また東京での生活がはじまり夫が家事の分担、保育園への送り迎えと今まで以上に協力をしてくれたので心身ともにどん底にあった私は立ち直る事ができた。収入源も二人そろってとだえたので電話を切られたりガスを切られたり：親戚から援助してもらった時は嬉しかった。洋服も二人で兼用が多く、一つのジーンズを二人ではいた。

同じ目的に向かってお互い励まし合いながら闘い続けてきて決して後悔はしていない。むしろ暖かい人間の心になれることができ、お互いあの頃よりは今のの方が人間的に成長したのではないかと思えるのである。いよいよ夫が沖電気の職場に戻る。私の分もそして71人いや八年前の合理化で職場を追われた者の代表として、ぜひ頑張っしてほしい。彼の父親はこの時を涙を流して喜んだという。これからは闘いである。「世の中捨てたもんじゃない」という彼の口ぐせ。いつも人間の暖かさに感動し励まされてきた八年。この財産をいつまでも大切に前向きに生きてゆかねばと思う。

相原勝美（沖電気争議団）

※夫の相原幸雄は本庄工場へ復帰、勝美は退職。

やっと、約束が果せるよ――



中野百合夫の妻・智寿子は、三人の子を育てながら夫と争議を支えた。

PHOTO 藤田庄市

結婚指輪を、いま……

「もし争議がなかったら結婚できなかった」と争議団の仲間は勝手に言っている事実、この間、私を含め二〇人近くが争議中に結婚した。このことは従来争議では考えられなかったことであり、「団員は明るい」と言われた要素でもあったと思う。

妻に「なぜ結婚する気になった？」のか深く聞いていないが、「沖電気争議は必ずしもものになる」と私に先行投資したと思っている。争議解決の晩には結婚指輪をプレゼントするのが妻との約束だった。やっとその日がきた。

争議中の家庭のやりくりは大変だったはず。毎年、全国オールドで二カ月間は家を空ける。その間の保育園への送り迎えは全て妻まかせ。子供は熱が出ることもしばしば、妻の年休の大半は費やされる。今年、一年生になる長男は卒園文集の「大きくなら何になりたいか？」に「沖電気に入りたい」と答えたそうだ。

子供の夢も先行投資も今、実った。カアチャン、三人の子供達、本当にありがとう。

中野百合夫（沖電気争議団）

会議結成記念文化の夕べ

体育館をいっぱい

御支援ありがとうございました

沖電気闘争に勝利を！

指名解雇から四年。共闘会議が発足し、一日も早く沖電気争議を勝利させよう。十一月三十日、東京体育館で「沖電気争議支援中央共闘会議結成記念文化の夕べ」が開催された。

前夜からの豪雨も朝には上り、各地から参加した八千人が会場をうめつくした。「沖電気争議に勝利を！」「行革・人勧凍結に更なる反撃を！」のスローガンをかけた集会は、指名解雇撤回のたたかいと、国労を始めとする官公労働者のたたかいと連帯し、総決起する場となりました。

報知印刷労組の山田晃二さんの司会で始まり、大牟礼共闘会議議長が主催者あいさつ。日本フィルハーモニー交響楽団の演奏、国労

の仲間による合唱「増田国労東京地本副委員長の決意表明。佐藤光政さんの熱唱。山本薩夫さんの話。野中マリ子さんの詩の朗読で激励を受けた後、沖電気争議団員と家族、共闘会議役員が紹介され、中山代表、倉持共闘会議議長が決意を述べました。シュプレコールについて日本フィルハーモニー交響楽団の伴奏で、会場をゆるがす「インターナショナル」の大会唱となりました。

沖電気争議の重要な時期にふさわしい大集会と成功いたしました。この成功は、今後の沖電気争議に大きな影響を与えるでしょう。

共闘会議と沖電気争議団は、集会の成功に励まれ、闘争勝利のために全力をあげる決意です。



カンパの訴えは東京争議団の仲間



▶ 百人近くなる沖電気争議団の仲間と家族
◀ 決意表明する中山沖電気争議団代表



誕生のうぶ声のように
沖電気争議団の詩

ふるさとの小さな町
集団就職の夜更けの窓
窓に顔をすり寄り泣いていた母
自分に腹を立てているように
黙って見送っていた父

二十年前

私は少女の顔で東京にやってきた
金の卵とまではやられて
生きることをはじめた

迷い子になりそうに大きな工場
電線にツバメが並んで止まるように
コンベアラインにすがりついて
何百人もの少女が働いていた
トイレに行くのはもろのこと
鼻をかむのも三交代

まるでモダンタイムスみたいな毎日だったが
私たちの労働が 組立てられ 組上げられて
大きな電話交換機にかわるとき
私は胸をはった

あの交換機の一部は私だ
私はそこにいる 私は生きている
そんな実態が

仕事のつらさをふきとほしてくれる日々

大きな工場は
まるで巨大な爬虫類の恐竜のように
毎年 何百人もの金の卵をのみこんだ
そのたびに工場が建ち
そのたびに会社は大きくなった
私も負けず金の卵から金のめん鳥になり
恋をして 結ばれて 子どもを生んだ
この子のためにも立派に生きよう
どんなにつらくとも

人間らしく誇りをもって生きていこう
私はいつかめん鳥の卵をやめた
喜しはすつと苦しかったが
人間らしく生きたいと
どんなつらさにも耐えた

そして一九七八年十一月二十一日

会社に必要なのは金の卵
あるいは金のめん鳥とおん鳥
人間はいらない

沖電気争議支援中央共闘

8,000人が東京体



熱唱の佐藤光政さん

▶ 舞台と会場と一体となつての大合唱



詩を朗読する野中さん

行革・人勧凍結に更なる反撃を！

日本フィルハーモニー交響楽団と
松本日フィル労組委員長

▶ 決意表明に立つ共闘会議の役員



集会余話

● 沖電気のある労働者、残業をすくも短時間、舞台裏では最後まで原稿に手を入れて時間として帰りの電車と一緒に帰る。た近所の人に「きつこい」なんて言われる所集いに言われて広が

中央共闘会議の役員

- 議長 倉持米一 (全国一般東京地本委員長)
- 副議長 大牟礼藤男 (東京都職員労働組合委員長)
- 同 増田市広 (国鉄労組東京地本副委員長)
- 同 安田治雄 (建設一般・全日自労東京本部委員長)
- 同 高橋治巳 (江戸川区労協議長)
- 事務局 井川昌之 (新聞労連東京地連副委員長)

(1982年11月30日現在)

集会によせられた電報

沖電気資本の不当な指名解雇攻撃に対し、労働者の士根性で闘いかいつけていること心から敬意を表します。大分でも佐伯追討、西日本電機と指名解雇が相次いでいますが、全県下の労働者の団結で善美に反撃を強めています。勝利を確信し、闘争戦線を拡大し、沖電気を包囲していきましょう。

大分県労評委員長 山尾 健三

=こんなに多かった=

集会参加者	8,000人
会場でのカンパ	741,718円
賛同カンパ団体	882労組・団体
配布したビラ	240,000枚
実行委員会	7地域

そんな夢えがあたりまゝとていふように会社は理由をもちやりつくりあげて首切りを強行したそんな理不尽は許せない

私たちに働く権利がある

そう叫び

希望退職に応じなかった百人の仲間

そこに謎いかる指名解雇の攻撃

その日を境に 私は工場の門の外に放り出された

人間らしく生きること

豊かな未来を夢みる

そんなつましい願いを捨ててしまつたら

私は生きている直打ちがない

何よりも母親を名乗る資格がない

私は償れない手つきで セッケンを胸につけた

七名の仲間が 同じセッケンを胸につけた

たが オルグの途中

交通事故で首の骨を折り

半身不随になる仲間が出た

二人の子供を残し

屋上から身を投げた職員の仲間もいた

首を切られたものも首を切られなかったものも

ひとしく闘いかかる試練

人間であることを証明するために

耐えなければならぬ日常

私たちは駆けだす ホンコツ車走らせ

南から北へ 日本列島を夢中で駆けぬけた

そこにあつためぐりのある夢

あたたかい仲間の掌

私たちは

解雇反対闘争とは

人間の絆をたしかめること

人間のとりでを築くことと知った

だからこそ いま

この人垣のなかで

勝利をしんぞく確信できる

誕生のうぶ声のよう

思いのたけを叫ぶことが出来る

勝てる これで勝てる

力寄せあえば 人間の尊厳が守られる世の中へ

いつかみんな

きつこととびつこととができる

この詩は沖電気の仲間によって作られ、集会のなかで俳優座の野中マリ子さんによって朗読されました。

デッカイ勝利をよろこぶ

●沖電気の職場から



会社は、指名解雇強行後、労働者を威圧する鉄の門をつくったり、テレビカメラを設置した。(八王子工場) PHOTO 森住 卓

闘いなしに首は守れない

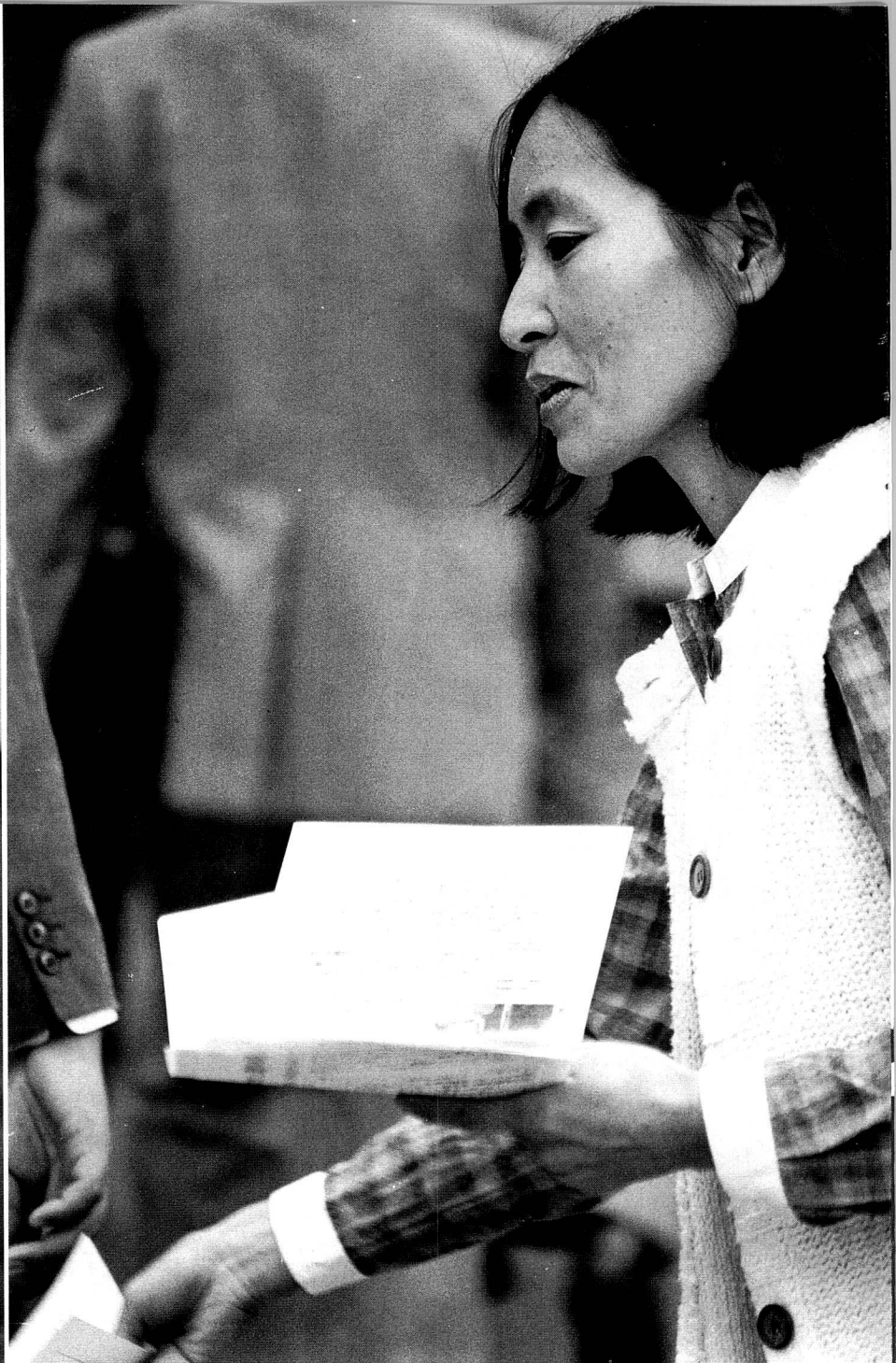
歴史的なストライキを闘った興奮と、思いがけない裏切りにあった挫折感が交錯する職場は、次第に疑心暗鬼の支配する職場に変っていく。

会社はテレビカメラを持ち出して労働者を監視しだした。いつの間にか労働者の一つ一つの行動が労務の知るところとなった。ビラをとるな、カンパをするな、と大の男が子供じみた説教を受ける毎日が続いた。

社休みの食堂には、さまざまな名札と作業衣の労働者であふれてきた。人手の少ない職場に大量の派遣労働者や新入社員が入ってきた。超長時間労働、地方の工場や関連企業への職場ごとの移動や移籍、単身赴任の増加等々、労働者の地位は一挙に流動的になった。

“雇用不安の状態にしておけば労働者は必死に働く”という錯覚は、多くの有能な労働者の流出を生み出した。

“右向け右”運動の柱としてM二〇〇



浅利さん(左)と中山さん(右)は、争議団の裁判を傍聴したという理由で、3年間、仕事をとりあげられた。

PHOTO 藤田庄市

運動という名の小集団活動が導入された。この運動への忠誠度がそのまま会社方針への忠誠度とみなされた。「M—〇〇」活動が忙しくて仕事ができない」といいながら、朝から晩までデッチ上げの作文に熱中する異様な風景が随所に現れた。その結果、全社的品質管理が品質事故多発となって返ってきた。

こうしたなかにも、良心をまげない労働者たちの物心両面の支援活動が続けられた。彼らは会社のありとあらゆる見せしめの仕打ちを受けた。サークル活動からの締め出し、職場親睦会からの排除、賃金・昇給差別、仕事のとりあげ等々。

東京工場の浅利さん・中山さんは「会社と争っている裁判に行くような人には重要な仕事をさせない」と公然と仕事をかえられた。二人は都労委へ提訴し、三年の闘いで、ついに仕事をとり戻した。この闘いの勝利は多くの労働者の心に確信をとりもどさせた。

やむを得ず退職させられた人、ささやかな支援さえも封殺された人、みせしめ排除にがんばり抜いた人たちは、今、このデッカイ勝利を心から喜んでいる。

「優良企業の待遇を保障するから」と、首切りを合理化しようとした資本の論理は粉碎された。団結して闘うことなしに首は保障されない、という真理も実証された。

職場にもどる仲間たち、一日も早く仕事に慣れ、再び団結の要として共にがんばっていかう。残念ながらもどれなかった仲間たち、次に会う時はお互いの活動の成果を競い合おう。

(S・M)

1987年3月、いま…

電機総行動

企業内から地域、産業別の闘いへ



街の灯が消えるなかで

いま、アメリカの軍拡政策、高金利政策により生じた赤字のつけによって生じた第三次円高。独占資本のこの円高不況を口実にした人べらし「合理化」の攻撃が全産業にわたってかけられてきています。鉄鋼、造船では数万人の首切り、炭鉱では、街の灯が消えるほどです。失業者は戦後最高、百万人を越え、さらに増大の傾向です。また、国民生活の上でも、中曽根政府、自民党の「戦後政治の総決算」と称して、福祉の切り捨て、マル優廃止、売上げ税に見られる大増税、など国民生活の破壊がおし進められてきています。また、「臨調行革路線」により国鉄分割民営化による十万人の大量首切りをはじめ、労基法改悪、司法、教育、地方自治など全分野にわたって反動的政策が進められています。

この背景には、日米軍事同盟をもとに、アメリカの戦略にいつそう加担しながら、国民収奪と海外への植民地政策を一層進めようとしている独占資本の八〇年代戦略があります。新たな戦略産業の位置づ



電機総行動は、8年間に13回おこなわれ、電機の争議解決に力を発揮した。

PHOTO 森住 卓

けをもった電機産業においても、一層の利潤追求と職場の専制支配確立をねらい、「合理化」、労働条件の切り下げが行なわれていきます。争議もこうしたなかで起こった事件でした。労働戦線における右翼的再編の動きは、独占資本の攻撃と深くかかわっています。

こうした今日の状況のもとで沖電気争議が勝利を勝ちとったことは、大きな意義があります。

勝利の要因の一つに「電機総行動」の闘いがあります。全国の電機の仲間が、自分たちの職場のたたかいと沖電気の争議を一つにして「電機総行動」を計画し実行委員会を発足させました。

総行動は、十三回を数え十二の個別争議の勝利を勝ちとり、百万枚をこえる工場宣伝、背景資本、各省庁への要請行動など幅広く活動を発展させてきました。そして、なによりも企業内の闘いを地域的、産業別の闘いとして発展させてきたのが、沖電気争議の勝利にも大きな力となったと確信しています。今また、独占資本による攻撃が新たな段階をむかえている時、闘いを社会的に広げ、すべての労働者と団結して闘うならば必ず勝利することを争議は証明したと思います。

「電機の職場に
一人の首切りも許すな!」
「すべての職場に
一人の首切りも許すな!」

福本 均(沖電気争議団)

沖電気争議団

座談会

走りつづけた八年

「首切り、そして8年」

司会●では、はじめに何が争議団を支えたのか、というあたりから……。

鹿角●私たちの勝利、もちろんそうなんだけど、本当に支えてくれた人たちの勝利だなあってすごく感じる。首切られたとき、びつくりしちゃったもんね。

カンバがぞくぞくきたもん。

あら、こんなにきていいもんかしらと思うくらいね……。

真喜志●大量解雇の報道も、特別なことをやってた人でなくて、ごくとなりにいるような



感じの人が首切られた、つていうような……。佐藤●首切りの項目みても、誰もがあてはまるものですよね、だから、明日は自分の身にそういつたところに共感してくれた人達が多かったんですね。

司会●あの時、ずいぶん大勢で争議が始まったなと思った。指名解雇に反対して立ち上ったのが、七人でしょ。四十七士じゃないけれど、よくぞこれだけ、という感じはありました。

高屋●僕自身がそうなんだけど、たくさん仲間がいたからこれだけでできた。争議が1人か2人で始まったら、後が続かなかつたんじゃない。

出席者

		解雇時の職場	復職先等
新納 一徳	38歳	本社	本社
鹿角サダ子	35歳	八王子	八王子
高屋 修	34歳	高崎	高崎
佐藤 正子	33歳	芝浦	退職・他労組の書記の仕事につく
真喜志 晃	34歳	品川	本庄
司 会			
野田 耕造		記録映画「リンゴの樹は育つ」監督 ～沖電気争議団7年の記録～	

やなかつたと思うけど。

鹿角●八王子だつてね、ちよぼちよぼ何人かやってる分にはさ、大変だつたもんね。東京にくると、わあつと人数がいるし、ああいいなあって感じだつたもんね、ああ、こんなに仲間がいっぱいいるなあって。(笑い)

新納●食つてくのは大変だつたけどね、多人数つてのは。

鹿角●でもそれだつて何とかやってこられたんだからね。

高屋●逆に多いから、食つてくために運動広げてきたこともある。

新納●頂度いい規模かもしれないね、もつと150人とか200人とかつて多かつたら……。

鹿角●そうね、多すぎてまとまりつかないしさ。(笑い)

佐藤●そうなつたらね、各県に常駐者派遣してさ(笑)。もつと密に、というか……。

司会●なるほどね、しかし、あなた方は闘い疲れというのはないね(笑)。若かつたせいだけでもないなあ。

鹿角●楽しかつたよね、多勢いたし、まわりの支援もあつたし。

高屋●うん、あんまり悲惨な状況にはならなかつた。

鹿角●必死だつたからね、駅頭なんかで、子どもおんぶしてねんねこきてさ、マイク持つて訴えてたの。まわりじゃねえ、やつぱり悲惨なやつて感じてみたみたいなのねえ。でもずつと走つてきた、というか、止まんなかつたから、悪いこと、どんどん忘れていくんだろ(笑)。(笑)

佐藤●私は一時止まつたけど(笑)。体もこわして田舎の青森に帰つて一年間休みましたんでね、争議を。で、帰つてきた時にね、仲間もそうでしたけど、担当先の支援してくれる人たちが、暖かく迎えてくれましたね。その時は、本当に感激しましたね。で、今日使っ

闘争日誌

■'78年

11月20日 指名解雇日
11月21日 就労闘争を開始
12月 東京地裁、同八王子支部、前橋地裁(群馬)、浦和地裁熊谷支部(埼玉)の四カ所に提訴。

12月19日 寮追い出し拒否闘争開始、以後解決まで居住する。

■'79年

1月20日 NHK「ルポルタージュにっぽん」で30分間放映。
5月 全国オルグ開始。

9月22日 被解雇者71名で沖電気争議団を結成。東京地方争議団共闘会議に加盟。

11月21日 一周年集会(日本教育会館、千六百人)

11月22日 富士銀行へ初の要請。
12月19日 江戸川区労協など七地区労で沖支援東部共闘会議を結成。

■'80年

12月29日 高島平団地で行商活動。
4月 沖支援港区労働組合連絡会議結成。板橋連絡会議結成。

4月22日 第一次電機総行動、以後毎年実施。

5月1日 メーデーの中央会場で宣伝、毎年実施。

5月16日 埼玉集会。

5月29日 決起集会(日比谷野外音楽堂。五千人)

11月 二周年闘争。各工場連鎖抗議集会、地域連帯集会、中央集

てるカバンなんかプロゼントしてくれたり、
ということ、とても嬉しかった。

「夢」

司会●争議中、どんな夢みた？

高屋●しよつちゅうみた夢が、それまで設計
やってたでしょ、で、いつのまにか会社の中
にはいつて、どつか隅の方で働いている…。
何年か、4、5年前まで、くり返しみたね。
司会●どつかから声がきこえてくるの？上司
とか。

高屋●明日からきてもいいよってそんな感じ
なんだ、誰がいつてことじゃなくて、で、
ふつとさめる。それだけ、自分、仕事好きだ
つたしね。設計やってただけ、やりたい
やりたいうつあつたんでしょ。

真喜志●そういう夢は、みなかつたな。ほく
のいた品川の工場は、すべくなつちやつた
からばく然と働きたいなっていうのは、あつ
てもイメージとして鮮明にっていうか、なか
なかでてこないね。

高屋●I・Oなんかで全部変つちやつた。だか
ら前は人間がやつた組立をね、一つのI・O
である程度出きちゃうと、そのI・Oで、人間
が組立てた仕事がおきかえられたり、ある
いは口ポットが、それをやつちやうというふ
うにね。

鹿角●旦那が、沖の職場に残っているせい
かしれないけど、私のみる夢は、いじめの夢
なんだね。ちよつと卑屈かもしれないけど…。
職場にはいつてよかつたって戻つたんだよね
それで、とにかくいじめられて…なんか泣
いたのかな、ほら夢みてるよって旦那に起き
れてああ、夢でよかつたなっていう（笑）。

司会●職場に戻ることに、覚悟したつ
てことだと思つてすけど。

佐藤●私は、仕事の夢みなかつたんです（笑）。
設計かなんか、仕事に誇りを持った人もある

んですが、私は現場で単純な仕事でしたから
好きというわけでもなかった。だから、働く
というよりも、会社に仕えるという感じでし
た。

司会●どこが違うの？

佐藤●働くつて、やっぱり自分が好きでない
とだめだなんて思いますよね。でないと、た
だいわれるままに自分が動くつていうかしら
ね。会社にいる時は、そういうことしたい考
えなかつた。争議をこまで闘つてきて、働
くつて何なのだろうつて考えるようになりま
した。

新納●僕はね、自分の希望と適性に関係なし



にね、営業やらされてたんですよ。好きもき
らいもなかった。ところが、争議中に、中古
のパソコン買つて、パソコン通信というのの
会員になつたんですよ。パソコン使つて、

いろいろ議論するんです。労働問題とか、い
ろいろ困つたことの相談もあつたりして、こ
ちらも、争議について伝えたり、運動にも使
えるんじゃないかと思つてるところです。普通
コンピューターは管理のための道具だけれど、
もっと人間に役立つものとして、製造会社の
人間としてチェックするということができな
いか…と。だから、最初は全然興味のな
い会社で就職したけど、今後は、割合興味のあ
る製品の会社に再就職するみたいと感じて、

まあよかつた、と。

「青春」

司会●ちよつと昔風にいえば、争議中は、み

んな、ちよつと青春真つただなかなんだけ
ども、どういう青春だつたのかな？

高屋●これが青春だと（笑い）。どつかの題名
みたいだね。考えてもしようがないこと
だし、で、そん中で一生懸命やつてきたわけ
だし。

鹿角●チリ紙交換から、それこそ、わあつと
何千人もいるところで訴えるとかさ、いろい
ろ経験できてよかつたと思う。

高尾●きたがわてつ（歌手）は、僕の後輩な
んだけど、すべ、とんできてくれて、歌つて
くれた。ひびけアコディオン」つてい
う歌なんですけど、それで伴奏やつてくれ
いうことでね、いっしょに舞台上に立つたり
して、沖電気の高屋さんですつて、紹介して
くれて、そこで訴えるというふうにして、そ
れが一番よかつたなあつて。会社にいたらで
きないことですよ。（笑）

新納●いろんなのがみえてくるのか。それ
と、中小企業で争議している人たちといっし
よに飲んだり泊つたりして、そこで自分は太
企業だなんてしみていてるところを実感す
るのも含めて、いろんな人とが世界を、のぞ
いたりできた。

佐藤●もう30すぎちゃつたんですよ。青春と
いう感じはしませんが。20代をふりかえ
ると前半は、沖電気ですつて、後半は、争
議団です。会社にいた時は、寮の生活を含め
て楽しかつたんですよ、思い出すと、出来
事がそんなになつて、まあ、貧弱だつたな
あつて感じですよ。（笑い）争議になつたと
き、ちよつと25になつたかな。人との出会
いも含めて毎日、毎日印象深いことがたくさん
ありました。

会など開催のべ五千人参加。

■'81年

3月24日 東京北部五地区労主主催
の支援集会（千五百人）

4月8日 初の富士銀行支店抗議
亀戸支店。

6月29日 八王子工場で転勤に応
じなかった田中さん解雇。

株主総会に、中山代表が初めて
出席し発言。

9月24日 東京工場の浅利・中山
さんへの仕事差別事件で都労委
へ申し立て。

10月23日 三周年中央集会（日比
谷野外音楽堂、七千人）。

10月27日 高崎集会（千人）。

11月17・21日 本社前抗議の座り
込み。

■'82年
4月12日 社長宅への要請行動。

3月・6月 富士銀各支店へ要請
行動。

11月11日 八王子集会

11月30日 中央共闘会議結成（八
千人・東京都体育館）

■'83年
4月27日 東京工場包囲デモ（千
六百人）。

9月30日 富士銀行本店へ要請行
動（三千五百人）。

2月22日 千代田区支援共闘会議
結成。

11月10日 埼玉支援共闘会議結成
（一三五〇人）

■'84年
11月29日 沖電気争議支援半日行
動。

1月3日 初めて重役宅へ年始あ
いさつをかねた要請。

1月19日 記録的な大雪の中、昼
休み本社抗議行動。
2月1・22日 21団体が連続の本
社抗議。

「戻る」

鹿角●やつとケリがついたと思うとね、うれしいですね。でも、職場が、だいぶ変っていると聞かされるので、それなりに決意をして帰えんきやとも思っています。8年前の職場のままだつたら、本当にうれしくて、うれしくてたまらないだろうけど(笑)。

佐藤●ホツとした反面、ちよつと、さびしいですね。私の場合、高校を卒業してすぐ入社して、争議もいっしょにやってきた人と、ほんとに仲良くやってきたので、それぞれ、いろんな工場に散らばったり、活動する分野が



違ってくるということで、少しさびしい気がします。

真喜志●不安もあるね。8年前働いていた品川工場(東京)がなくなつて本庄工場の方に行くことになつてからね。どんな土地で、どういふ雰囲気かも全くわからないし。

新納●今年の初め頃は、すごく嬉しくて、お金をよく忘れたりして、車にでもぶつかるんじゃないか、と、冗談をいわれたぐらいだったんだけど……。賞金差別が、そのままだということになつてから、戻つても、くらしの面がね、きびしいな、という感じ。

司会●戻つて、やりたいことはどんなこと? 鹿角●困難だろうけど、一人一人にやつぱりさあ、外で学んできたこと、例えば、給料の

ことだつて、本当にまわりが、どんな春闘だたかつてね、どういふふうになつてかちとつてやつていくか、というふうなことを、伝えてゆく。支援してくれた人たちに、自分が

いる教えてもらったことを職場の人に伝えてゆくっていいことね。それから何てつたつて、会社は、あの時、われわれをひぼう中傷して、会社をつぶす連中だよね、企業破壊者だ、みたいなことをいって放りだしたんだけれども、それが、こう職場に帰るわけだからね、我々が帰ることによつて多少は雰囲気かわるんじゃないか、と、思つてるんだけど。佐藤●私の場合、別の労働組合の書記の仕事になるんです。私が、自分なりに好きで選んだ仕事なので、いつも明るく元気です。心にかけているんです。でも、慣れてくるとダツてくるんで、そのことを肝に命じて、頑張つていきたいなあ、と思つてるんです。

真喜志●他の職場、たくさんみてきてね、電機の職場なんてのは凄い。つとめている旦那がノイローゼになつて、奥さんが子ども連れ



て自殺したり、朝職場へいつたら死んでたとか、仕事に対する見方がずれているのか、それとも社会的に文化だとか、そういうものが足りないんだとかか……。そういうことを、職場に入つても、ちゃんと話ができなければあつていふうには思つてるんですけど……。まあ最初は肩ひじ張らないでつ

ていうか、早く職場にたけこむのが必要じゃあないか。

高屋●職場に戻れば、会社の中からは、異質な人間だと思つたけど、それを自分で否定するんじゃないかと、会社の中でいっばい切り捨てられることあるでしょ。会社の理想とする効率からすると、こういう人間はいらないと、それをひろいあげるといふかね。実際は、今の会社でいじめられている人が僕をいじめることで、会社の秩序を保とうとすると思うから、大変だ、とは思つけれども、ぼくらのスレが、遅れているってことじゃないかと、結構意味があるもんだ、という形で囲りにひろがつていけば成功になるんじゃないか、と。

新納●まあ、職場も、この8年大きく変つて宇宙人みたいなもんだね。俺たちは(笑)。これは、しょうがない。職場の人にしても、その人たちが自身が監視されてるでしょ。変に親しくするとまずいからね。自分だけとびはねてもいけないし、いじめてもいけないし、その辺がね。どうすりゃ、いいか。

鹿角●とにかく、止まらないと思うよ。走つてた方が楽だよ。何かつてれば、何かでてくるさ。

高屋●そりゃそだよ。止まると苦しいからさ。

新納●足動かしれば何とか、なるよ。

司会●最後に特に言いたいことがあれば……。

鹿角●本当に支援をしていただいてね、こうやつて闘つてこれんだから。みなさんのおかげだというのは、いつもあるのね。

ととも一人じゃ闘えなかつた。仲間がいたからなんだね。仲間に私はありがたうって思いきり大きな声で言いたいんだよね。

真喜志●家族とね。

鹿角●そだね、家族とね。

(三月・東京で)

2月8日 中央共闘会議の倉持議長死去。

3月18日 争議団と中央共闘会議で「コンピュータ・情報化社会を考える」のシンポジウム。

5月21日 東京地裁で和解交渉開始。

8月3日 原告の伊藤善正さん急逝(64歳・心筋こう塞)。

11月30日 中電気総行動(四千人)。

12月17日 浅利・中山仕事差別事件、この日から元の仕事に。

■'85年

2月5日 全国からの個人署名40万人分中電気に提出。

1月19日 東京争議団議長に中山森夫さんが就任。

6月18日 第10回和解交渉。中電気「解決金一人一千万円復職なし」の和解案を提示。

9月22日 中電気城下町の本庄市で、支援のふれあいまつり(八千五百人)。

11月21日 中電気総行動。

11月15日 品川共闘会議結成集会。

12月12日 第13回和解交渉裁判所「35名を現実に復職させる」という和解の基本案を示す。

■'86年

2月4月 勝利めざし連続行動各工場、東京の東西南北、中央集会のべ一万五千人が参加。

8月26日 第18回和解交渉、中電気35名復職の受け入れを表明。

11月21日 中電気争議支援中央集会。

■'87年

2月27日 裁判所和解案を提示。

3月13日 中電気争議解決。



掃除

争議団は全員そうじ団でもあった。

PHOTO 森住 卓

沖電気そうじ団 に栄光あれ

竹の子族ならず、ほうき族登場。集会後の掃除は、大きな財政源になった。明治公園、代々木公園と忙しい。争議団がそろってほうきをもち一斉に。ビラの多い日、雨の日は時間がかかりづらい。回数を重ねることに、要領もつかみ、早く終った時が格別。

あまりにもわがそうじ団が集会に出没するので、テキヤさんから「こんど、どこで集会がありますか」との問合せが団事務所にもくるくらい。

集会の掃除だけではない。月一回の沖電気本社抗議行動では、何百人という支援の人たちが集まる。通行のじやまにならないよう交通整理にも気をつかうが、何んといつても、集会後のタバコのすいがらのかたづけ。世論に訴え支援を得ている争議団がいくら敵の社前でもすいがらをちらかしたままでは支援は得られない。世の中の悪もはき清める。せつせ、せつせと。沖電気そうじ団に栄光あれ！

佐藤辰美(沖電気争議団)

結婚

首を切られても結婚できる

全国から、歯ぶらしや鍋……

「ひけめ」をのりこえて

屋代 真

結婚する意志を双方の両親に打ち明けるとき、いやなものはない。ましてや首を切られている者となるとなのおのこと。妻の両親には、「しあわせにします」という言葉がとうとう言えなかった。指名解雇の不当性とか争議の展望とかを、「明日勝利してもおかしくない」と言った調子でしゃべりまくった。ちよつと早いのは……予想された答えだったがシヨックだった。それよりもっと手ごわい存在は、自分の両親であった。「身のほど知らず」と言われ説得のしようがなかった。仕方

なく長文の手紙を書き送った。首を切られた者だって、悪い事をしたわけではなく、人並のしあわせをつかんだっていいではないか」と。そして、二人の両親は不在ではあったが、どんな境遇でも幸福は追求しようと仲間達の手によつて、にぎやかな結婚式をやつてもらった。ふりかえつてみれば、首を切られた者の「ひけめ」を感じた時期でもあったが、全国の仲間から、歯ぶらしやなべなど、ダンボール箱に何箱もいただき感激をし、闘う活力をあたえてもらった。

(沖電気争議団)

仲間にはげまされて

屋代美智子

争議とは、何なのかも知らずに結婚して五年。ふりかえつてみれば本当に短い。夫は、オルグ、朝ビラ、夜の会議の繰り返し。私の方も仕事と、すれ違いの毎日。顔を合わせるのも少なく、新鮮かつ他人行儀な夫婦で兄妹のようだと、本人たちもいい気だった新婚一年目だった。だんだん月日がたつうちに夫が疲れて帰ってきて、夜、熱をだし「ハーハー」とつらそうにしている。「明日はどうしても出なければならぬ」という言葉を聞き、くやしさを腹立たしさを誰にぶつけたら

いいのか。どうしてこんな思いまでしなければならぬのか。この人を休ませるためには、いつそ階段からつきおとして足の一本でも折つてやろうと本人の立っている後ろで何度思ったかしかない。それでも、三年目には長男、そして二年後に次男を出産した。日増しにたくましくなる息子たち。そして私は、今では「多少の熟など何でもない負けるな」とハッパをかけるまでになった。短いと思つていた五年は、支援して下さった全国のみなさん、職場の同僚、家族に励まされていたからです。これからも、仲間と一緒に頑張つていこうと思ひます。

(屋代真・妻・法律事務所勤務)

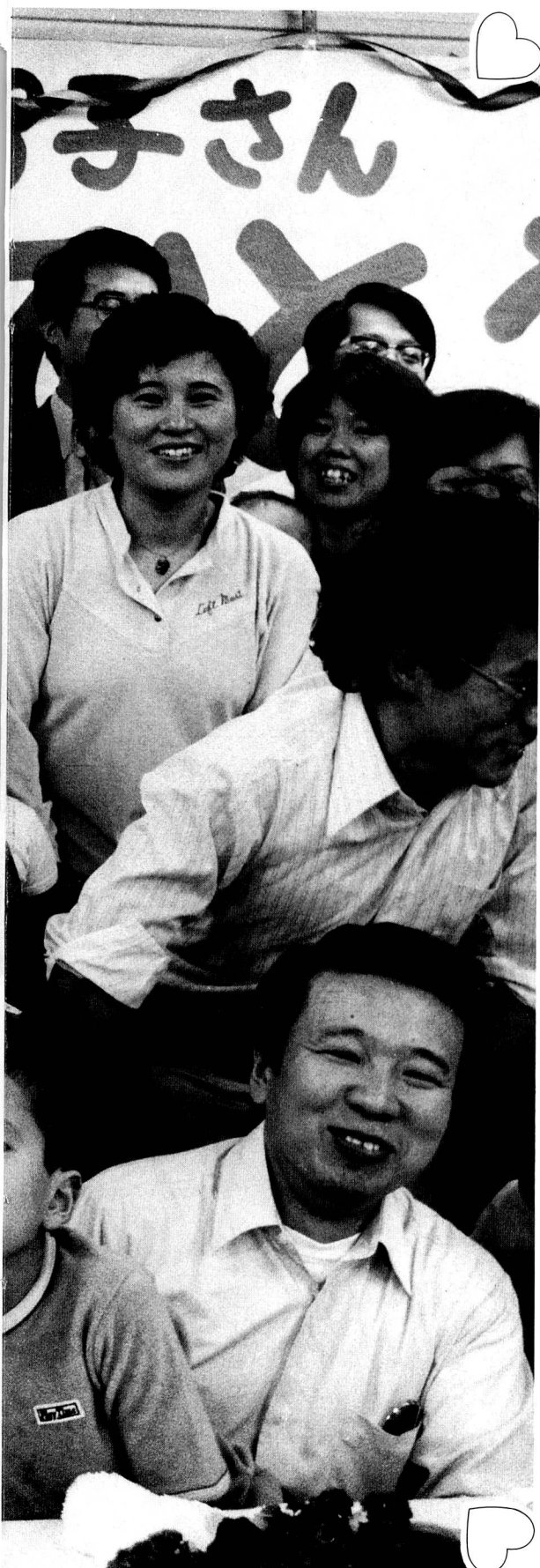


PHOTO 藤田庄市



解雇されても人間らしく生きる権利はある。屋代 真は、労働学校の教室で結婚式をあげた。